

【第14回年次大会 研究発表 要旨】

小説タイトルの翻訳とジェンダー：  
『ボヴァリー夫人』について

三原智子

日本でフランス文学が翻訳されてからまもなく150年がたとうとしている。以来、翻訳者たちは、異なる文化を背景にした小説を異なる言葉を用いて日本に紹介するため、原文に変更を加えることをしばしば強いられてきた。本発表ではその中でも特に、小説のタイトルの翻訳について、ジェンダー視点より検証してみた。

翻訳によってタイトルに「女性性」が付け加えられた最も有名なフランス小説の例は、ギー・ド・モーパッサンの *Une vie* であろう（直訳すると『ある生涯』）。この小説の日本語タイトルは『女の一生』、つまり英語訳を介して日本語に訳される際、原文には存在しないジェンダーについての示唆が加えられた。逆に、翻訳によって、原文に存在した含意が消えた例としては、オノレ・ド・バルザックの *La cousine Bette* を挙げることができる。日本語タイトル『従妹ベツト』は原題を直訳しているものの、*Bette* の同音異義語から連想される女性蔑視的なニュアンスは消えている。

では、フランスの同じく19世紀の小説家、ギュスターヴ・フローベールの *Madame Bovary* はどうであろうか。日本では『ボヴァリー夫人』と訳されるのが通例であるが、この題名は原文を忠実に訳しているといえるだろうか。

一見すると、前述の例に比べ『ボヴァリー夫人』は目をひくような含意を原文に加えていない。主人公エンマ・ボヴァリーの敬称を採ったシンプルなタイトルは、意識のしようがないかのようにも見える。しかし、実際には、「madame」を「夫人」と訳すことは決して自明のことではない。それは、小説テキストのなかにも出現するさまざまな「madame」をとりあげ、それらがどのように訳されているかを見ることで明らかになる。

たとえば、フランス語の原文において「madame」が単独で用いられる場合、この語が翻訳版において「夫人」と訳されることはまずない。代わりに「奥さん」などの訳語が使われる。名前の前につけられる場合でも、「〇〇夫人」だけではなく「〇〇のおかみ」、「〇〇の奥さん」などの訳が頻繁に用いられる。訳が省略されることさえある。これは、フランス語と日本語の自由間接話法の使用の違いによるものである。また、両言語における、語の繰り返しについての感受性の違いにも起因している。

このように、翻訳者たちはさまざまな理由から、小説の中の「madame」を訳し分けることを余儀なくされる。しかし、それにもかかわらず、主人公である「madame Bovary」については、一貫して「ボヴァリー夫人」という訳を採用する。なぜなら、この訳語は、「ボヴァリーの奥さん」にも「ボヴァリーさん」にもない、特殊な意味を帯びているからである。すなわち、『ボヴァリー夫人』という小説のタイトルは決して無作為なものではなく、日本の文学の歴史的な文脈のなかで、ある種の紋切り型の「女性性」を含意しているのである。

(みはら ともこ・群馬大学准教授)